ジオパークネットワークを活用した教育連携の拡大と深化
～山陰海岸ジオパークと公立鳥取環境大学の場合～

環境学部　准教授　新　名　阿津子

１．はじめに

本報告は2016年度に公立鳥取環境大学で実施したジオパークネットワークを活用した教育と地域活動の実践のうち、教育連携について報告するものである。

文部科学省が主導する「地（知）の拠点事業（Center of Community）」でも明示されたように、「教育」、「研究」に加え、大学が果たす社会的役割に「地域連携」、「地域貢献」が求められるようになった。特に、「地方創生」のスローガンの下、大学が立地する地域とのコミュニケーションをとり、活動を実践することによって、立地地域への学生の就職率および地元定着率の向上が大学に課された。その是非についてはここでは議論しないが、大学を取り巻く社会状況やニーズの変化によって、特に地方国立・公立大学のあり方は大きく変化しようとしている。

本学環境学部が得意とするフィールドサイエンスに基づく教育活動では、野外に出て、景観や動植物、人の活動を丹念に観察し記録する活動を行ってきた。フィールドサイエンスの学問を修学するためには野外学習が必用不可欠であるが、そこには様々なリスク、負担、無理解が存在するのも事実である。しかしながら、「教育」、「研究」、「地域連携・地域貢献」を大学という場所で可能なものにするためには、フィールドサイエンスの役割は看過できず、大学と地域が共に学生に対する教育や活動の機会を提供し、それを実施することで達成できるのではないだろうか。

それを実践するフィールドとしてのジオパークについては新名（2013）で指摘したように、地域と学生、教員の相互学習による教育は一定の成果を納めている。このことからも、大学教育や大学の地域貢献においてジオパークをパートナーシップを構築する対象として評価できる。そもそも、ジオパークは生態系や文化と地形や地質といった非生物圏との相互関係を紐解きながら「持続可能な開発」の実践と地域性の再構築を目指すことをその目的としており、研究機関との協力関係や次世代教育は必要不可欠である。

地域との連携を進めるにあたり重要なのは、地域との継続した活動実践である。公立鳥取環境大学では、2014年7月には山陰海岸ジオパーク推進協議会と連携協定を結び、学術研究から地域振興まで幅広い分野での協力を進めることとなった。学内では筆者が中心となりジオパークを通じた教育活動と地域連携事業を推進してきた（新名2014，2015，2016）。

本年度はこれまで行ってきたジオパークを活用した教育と地域連携の活動を大学正規カリキュラムと課外活動の中で実施したことに加え、「ジオパーク科学実験教室」、「ジオパークサイエンスカフェ」、「ジオパーク集中講義」といった社会教育活動プログラムを展開した。そのうち、本年度の特別研究費を活用したプログラムは課外活動「海の中のジオパーク」では、新たに「スノーケルリーダー養成

講座」を設置し、メニューの充実を図った[1)]。また社会教育活動プロブラムは、鳥取県からの委託事業として実施した。

２．ジオパークネットワークを活用した教育活動

２．１．　環境学フィールド演習（人間環境担当分）

環境学フィールド演習は、環境学部1年生を対象とした前期開講科目であり、環境学部で学ぶことになる各分野（自然環境・循環型社会・人間環境）の実態を理解すること、フィールド活動を通じて基礎的なノウハウを理解することを目的としている。その中で、筆者が担当した人間環境プログラムでは鳥取における自然環境と人々の暮らしを学習するために国府町、湖山池、鹿野町の３地域で巡検を行った。

ここでは教員による説明ではなく、地域で活動するガイド団体や博物館に協力を依頼し、地域の人の語りを聞くことによる学習を実施した。そのうち半日巡検を実施した鹿野町では、民家に隣接する鹿野断層へ行き鳥取地震についての解説を受け、その後中世の都市構造を残す街なかをガイドと共に散策しながら、歴史遺産と街づくりについての理解を深めた（写真1）。

写真1　鳥取市鹿野町での巡検の様子（2016年、筆者撮影）

実施後の学生レポートでは、「鳥取砂丘以外の鳥取を知ることができた」、「ガイドの方の解説があったおかげで、景観の意味を知ることができた」、「この授業で自分の出身地についても考えるようになった」との感想があった。またガイドからは「若い人との交流は楽しく、生きがいになる」、教員からは「知らないことを知ることができた」、施設からは「こういった連携を進めたい」との感想があり、学生、ガイド、教員、施設の４者にとって相互学習の場となり、地域資源の教区活用の場となったといえよう。

２．２．　プロジェクト研究１・３「山陰海岸ジオパーク～岩美町の土地利用調査～」

岩美町の変容の一端を明らかにすることを目的に、岩美町での土地利用調査を実施した。調査地域は岩美駅周辺、浦富海岸、岩井温泉であり、岩美町との比較をするために兵庫県豊岡市で一泊二日の巡検を実施した。

まず、岩美町の概要を知るために、岩美ガイドクラブの岸さんのガイドによりゼネラルサーベイを実施した（写真２）。岸さんによる語りと学生とのコミュニケーションは経験に基づく学習となり、

写真2　ガイドの解説による岩美町でのゼネラルサーベイ（2016年、筆者撮影）

学生の岩美町に対する理解が深まった。また、豊岡市竹野で開催された「第１回豊岡まちなみゼミ竹野大会2015」へ参加し、浦富集落との比較をするため、竹野の焼杉板集落を観察しながら、山陰地域に広く分布する石州瓦についても学習した（写真３）。夜は竹野の旅館に宿泊し、竹野で自然観察指導員をしている笠浪さんより竹野の地質について岩石を用いた解説が行われた。翌日は兵庫県立大学大学院の井口先生による猫崎半島の地質解説が行われ、午後は岩井温泉との比較をするために城崎温泉で温泉景観やまちなみ観察を行った。帰路は餘部で百層崖や橋梁でリアス海岸と人々の暮らしを解説したのち鳥取へ戻った。

写真3　豊岡まちづくり竹野大会で焼杉板の集落観察（2016年、筆者撮影）

その後、３年生のTAも参加し、浦富・岩美駅周辺・岩井温泉の３地域で土地利用調査を行なった。その結果から土地利用図を作図し、景観的な特徴や変化、豊岡との比較検討を実施した。特に、岩井温泉では住宅化が進展しており、地域の人も発展を望まないという結果も得られ、今後の地域振興に一石を投じる結果となった。

２.３．プロジェクト研究２・４「春来のこれまでとこれから」

ここでは新温泉町春来地区を対象に、地域調査を行い、春来地区の地域課題とその解決策を考えることを目的とした授業を展開した。春来地区は1400年以上の歴史を持つ山間集落であるが、近年では少子高齢化が進み、耕作放棄地および獣害の拡大、空き校舎の利活用方法とさまざまな課題を抱えている。春来地区とは2016年5月に新温泉町役場より筆者に講演依頼があったことから連携がスタートした。本講演はジオパーク推進協議会が実施する講師派遣事業を利用したものであり、ジオパークのネットワークが寄与している。この講演会をきっかけに春来との協議の中でお互いが無理をしない連携のあり方の模索が始まった。その中の一つがこのプロジェクト研究２・４での調査研究である。

学生は12月の住民ヒアリング調査に向け、10・11月と月に一度、集落を訪れ、城が山での登山、棚

写真4　春来で区長から解説を受ける（2016年、筆者撮影）

田と耕作放棄地、獣害被害の状況確認、集落が委託管理する椿山公園、旧春来小学校や萬福寺見学など、区長らと共に実施した（写真４）。10月の巡検では神戸大学附属中等学校の教員・生徒も参加し、高大地域連携による学習機会の創出を図った。教室では学生の興味関心に応じたグループ編成を行い、農業担い手班、獣害班、生活・交通班、小学校跡地活用班の４グループに分かれ、他事例の収集や住民ヒアリングに向けた項目作成を実施した。

11月下旬からはユニテック工科大学からの短期留学生2名が参加し、オークランドの住宅問題のプレゼンテーションを行なった。ここではオークランドの過密問題が紹介され、春来が抱える過疎の問題と正反対の課題を認識するに至った。そして、12月に春来地区の住民ヒアリング調査をほぼ悉皆調査することができた[2)]。

写真5　春来での調査報告会（2017年、筆者撮影）

調査結果を集計、分析し、学内での報告と集落での住民対象の報告会を実施した（写真５）。住民対象報告会では、学生自身が自分たちの研究成果が地域に還元できることを学び、大きな成長が見られた。また、地域サイドも学生の調査結果に対し、新たな発見や課題が見つかったと評価していた。さらに春来との連携の中で就農を目指す学生の移住が決定した。現在、地域おこし協力隊として新温泉町へと移住しており、大学と地域の連携活動が学生のキャリア形成に大きく寄与した事例となった[3)]。

２．４．エコツーリズム論における「鳥取砂丘巡検」

経営学部３年生を対象とした専門科目「エコツーリズム論」では、鳥取砂丘半日巡検を実施している。鳥取砂丘はエコツーリズム推進協議会を設立し活動しているわけではないが、自然環境の保全と活用という大きな枠組みの中で観光を論じる際に外せない事例であり、ジオパークの中でも目玉サイトの一つである。さらに、本学学生にとっては誰しもが一度は訪れたことのある身近な場所である。また本講義は80人の受講生がおり、大山などこれまでエコツーリズムに取り組んできた地域へのバスを使った１日巡検を実施するには、人・コスト面で難しく、授業運営という点からも砂丘での実施がベストであった。

写真6　鳥取砂丘巡検の様子（2016年、筆者撮影）

ここでは鳥取砂丘ジオパークセンターを運営する自然公園財団鳥取支部との連携のもと、ビジターセンターでの砂丘解説、実際に砂丘内をガイドと歩きながら観察する３時間の巡検を実施した（写真６）。また、教員による事前と事後学習を行い、鳥取砂丘における自然観光のあり方を検討した。
学生からは「経営学部はあまり野外に出て活動しないので、今回の機会は貴重であり有意義であった」、「これまで観光で訪れていた鳥取砂丘の見方が変わった」、「観光の理論と実践の難しさを知った」といった感想が聞かれ、ガイドからは「学生の中から一人でも二人でも砂丘の活動に参加してくれる人が出てきてくれると嬉しい。そのためにも、こういう大学との授業での連携があると良い」との意見が出された。

３．おわりに

本報告では2016年度に公立鳥取環境大学で実施したジオパークネットワークを活用した教育連携の拡大と深化について紹介してきた。2016年度の活動は、これまで地域との連携の中で実施してきたジオパークを活用した教育活動や地域連携活動のなかで培ってきた地域内ネットワークが拡大と深化を見せた年となったと考える。特筆すべきは2016年度より連携事業を開始した春来地区との関係である。春来地区は山陰海岸ジオパークのエリア内に位置するも、ジオパークへの活動参加が見られなかった地域である。もちろん、まだ積極的にジオパーク活動へ参加している状況にはないが、2017年度に本

学ジオ部との本格的な連携が始まり、ジオパーク活動の新たな方向性が見えて来るのではないかと期待できる事例であると考える。引き続き、ジオパークを活用した教育活動・地域連携活動を実践していきたい。

謝辞

本学におけるジオパークを活用した教育活動・地域連携活動を実施するにあたり、春来地区区長の田中彰様、同副区長の福井亮一様、いなば国府ガイドクラブ様、万葉歴史館様、教育委員会文化財課佐々木孝文様、上地集落の谷口五郎様、ぷらっと鹿野ガイドの会前田卓哉様、湖山池情報プラザの岡田一成様、とっとりガイドクラブの山根正司様、岩美ガイドクラブ岸憲一様、ブルーライン田後の山崎英治様、山陰松島遊覧様、鳥取砂丘ジオパークセンター様をはじめとする皆様には多大なるご協力を賜りました。全ての方のお名前を上げることはできませんが、末筆ながら記して御礼申し上げます。

注

１）本年度は参加学生５名（スクーバ２名、アドバンス３名）という結果であり、参加者の獲得が課題となった。

２）調査結果については報告書として今後、刊行予定である。

３）本事例についても２）とともに報告書として刊行する予定である。

参考文献

新名阿津子　2014.　地域と大学をつなぐフィールドとしての山陰海岸ジオパーク
2013年度地域イノベーション研究：28-36.

新名阿津子　2015.　鳥取環境大学におけるジオパークを活用した教育実践
2014年度地域イノベーション研究：22-31.

新名阿津子　2016.　公立鳥取環境大学におけるジオパークを活用した教育プログラムの開発
2015年度地域イノベーション研究：16-21.